

銀河の上じや遊べない

いんげんがく

目の前に広がる、真っ黒い世界に白い転々が散らばる写真。小さなころはこの写真が天の川だっことを知らなかったけれど高校生になった私にはもちろんわかる。

もうすぐ七夕だ。このところずっと梅雨を引きずっているから、当日も雨が降るんじゃないかと思う。織姫と彦星は会えない、きっと。どんな話か知らないけど。

「もうすぐ七夕、か」

室内がざわついているなどは思っていたけれど、頭の上から降ってきたやわらかい声ではっとした。顔をあげなくても誰かはわかる。私の向かい側の席に腰を下ろした彼は、白いTシャツを泥で汚して、頬にもかびかびに乾いた泥とついでにいくつかの赤い痣が目立つ。それなのに色素の薄いせいでやわらかくゆれる茶色い髪の毛はきれいだった。ガラスのように透明な瞳で私を見ている。

「天の川なんかさ、きっと汚いよ。星なんか塵のようなものだよ」

「永樹（えいき）」

彼は気にせず、私の見ていた宇宙の写真集を反対側から覗き込んでくる。やわらかい髪の毛が私の鼻先をかすめるが、その見た目からはおよそ似つかわしくない川原のいやな生臭さが漂った。至近距離で目が合う。瞳に私がうつっている。何もかもを見透かすような目に、もうずっとなれたつもりではいたけれどやっぱり慣れてはいなかった。絶えられなくてそらす。何を思われただろうということよりも、何を思っているかを知られるほうが怖い。しかし彼——永樹（えいき）は気にしていないようで、また視線を写真に戻した。周りのざわつきが耳につく。私は写真集を奪うようにしてもとの場所にもどし、彼の腕を引っ張りながら走って図書館を出た。隣接する公園をぬけて、できるだけ人目につかない道を通って川原までくる。

川を繋ぐのは大きな一つの橋。片側二車線と、歩行者用の通路がついているそれなりに大きな橋だ。正式名称はあるみたいだけど、通称「つなぎ橋」。その名のとおり、「あっち」と「こっち」を繋いでいるからだ。小さなころから親もその親もそう呼ぶし、私の周りの人だってそう呼ぶし、私に子供ができてそう教えるだろうと思う。晴れているのなら、夏のまぶしい陽をうけてきらきらしているはずの川面だったが、生憎の曇り空でいつも以上に濁って見えた。じめじめとした空気が肌にまとわりつくようで不快すぎる。橋を半分ほど渡ったぐらいで、やっと永樹の腕を放した。掌にじっとり汗をかいている。彼の腕の、掴んでいた部分がほんのり赤くなっていた。立ち止まった途端に汗が額から流れ出てくる。気づかなかったけれど、湿気と川原に生える草の青臭さが妙に溶け込んで、生臭かった。永樹の頭のおいと一緒だった。

「そんな格好でうろちょろしないで」

「なんで」

「着替えればいいでしょ」

日曜の真っ昼間ということもあって、車も通行人も0に近い。自分の声が、異常にヒステリックに響くのがわかる。汗がこめかみを流れる。Tシャツの中に着ているキャミソールが背中にくっつくのが気持ち悪い。生臭い。この苛立ちを本当は永樹にぶつけるべきことではないことぐらい、私にだってわかる。けれど、永樹が飄々としているのを見ると、どうしても叫びたくなってしまう。

彼はお手上げだ、という感じで肩をすくめると欄干にもたれかかって川を眺めた。深呼吸してから隣に並ぶ。川原にはジュニアサッカー用のコートだったりとか、野球のグラウンドだったり、少し背の高い草に囲まれながら整備されている。私たちの通った小学校、中学校、現在通っている高校も、背の順でならんでいる。運動部の声がかこまで聞こえてきそうだった。

「……何されたの」

川を眺めたままいう。最近よく降る雨のせいで濁ったままの川は、流れているのかどうかもわからない。たまに白いあぶくみたいなのが浮いている。ふと、天の川の写真の、無数に散らばる星を思い出した。

「何って、いつも通りだよ。今日は久しぶりに草ん中に放り込まれたかな。なんかすごい草いきれの匂いするよね、俺。川に落とされなくてすんだけど」

「なんで」

「ん？」

思わず顔をあげて永樹を見てしまい、彼は案の定というかそれが普通だけど私の方をじっと見ている、言葉に詰まった。なんで、抵抗しないの。なんで、やり返さないの。そんなこと言ったところで、もし実行したところで、何も変わらないのだということ、永樹自身が身を持って知っている。たった十数年の人生の中で自分の意思ではどうにもならないということ、彼は私以上に知っている。なんでもない、と呟いて川に目を落とした。相変わらず濁っている。またあぶくがいくつか流れていった。

*

「昨日、鹿野（かの）と一緒にいたでしょう」

月曜の休憩時間、理子（さとこ）が耳元でぼそぼそ呟いた。ぼうっとしていたのではっとして顔を向ける。彼女はいかにもつまらない、という顔でこちらを見ていた。赤いフレームのめがねをしているからか、頬がほんのり紅潮しているように見えた

「え、うん」

「やめなよ、何度も言ってるじゃん。『あっち』の人間なんだよ」

「でも、永樹はいい人だよ」

「どこが？ 髪の毛も目も、隠そうともしないでさ、逆に見せ付けてる感じじゃん。あたしああいうの、好きくない」

自分も、髪の毛茶色いのに？ と尋ねたくなってやめた。そういうメンドウなことは、私たちはしない。そういう空気の読めないことはしない。尋ねたって、理子の茶髪は「染めた」からだし永樹の茶髪は「地毛」で「あっち」の人間だから、違うのだ。不意に湿った匂いが外から流れ込んできて、同時に誰かが雨だと呟いた。朝からむしむしと湿気を帯びた空気だったのは、雨が降る予兆だったのだろう。急いで窓を閉める。もともと風が入ってこないからといっても、窓を閉め切ってしまうと蒸し風呂状態になる。みんなが余計にぐだる。あーあ、という呟きが教室を満たす。

「てかさ、そもそも遊都（ゆず）と鹿野って付き合ってるの？」

理子は私の後ろの席に座り、髪の毛をいじりはじめた。毛束を指先で遊びながら枝毛を確認するみたいにしている。別に興味ありませんけど、という態度で、でも本当は興味津々です、という態度。

「付き合っていないよ」

「でも、よく一緒にいるじゃん」

「たまたまだよ、たまたま」

「ふうん？」

めがね越しに目が合う。真っ黒い目。何を考えているのかも、わからない。それから彼女はずっと髪の毛をいじっていて、もうしゃべらなかつた。じわりと鼻の頭に汗をかいた。

*

――川が「あっち」と「こっち」を分けている。昔は橋などかかっていたそうだけど、いつの時代だったか橋がかかった。「あっち」と「こっち」は一緒になった。だけど、「あっち」に生まれる人の姿かたちと「こっち」に生まれる人の姿かたちがほんのちょっと違った。まるでゆれる稲穂のように美しい髪の毛と、琥珀色の瞳。「こっち」の人よりもきめのこまやかな肌。同じ言語を話し、同じ文化を持っているのに、「こっち」の人たちはその見た目だけで、「あっち」の人たちを、同じ人とは思えなかつた。だから、「こっち」の人は「あっち」の人を嫌った――

織姫と彦星の話もそうだけど、この話がどういう終わりだったのか、私は覚えていない。思い出そうとしても、この部分しか思い出せない。おばあちゃんが、哀しそうな顔で教えてくれた話だ。

現在「あっち」と「こっち」の人の外見が違うか、というとたまに永樹のような外見の子は生まれてくるけれど決して多いわけじゃないし、外見だけが原因じゃない。彼らの住む場所に、今はないけれど川の流れの悪い場所があって悪臭がしていたそうだ。彼らの仕事の主なものに獣の皮をはぐ、いわゆる「汚れた」仕事があったそうだ。そういうものが本当だったのか誇張されたものなのか、私にはわからない。だけど、川が「あっち」と「こっち」を隔てている。そして、その流れは目に見えないのに「こっち」の人間の中には確実に存在する。学校の中にも「急進派」がいて、先生だったり生徒だったりその親だったりする彼らは「あっち」の人を排除しようとする。それ以外の人には手出しはできない。確実に「急進派」が多いからだ。永樹やその友達が謗られても嘲笑われても、何もできない。結局、動く勇気がないのと同じなのかもしれない。だけど、もう何十年と続くその因習に勝つことなど、不可能に思える。「あっち」の人や「急進派」以外の人たちから学校を別にしてくれという、痛切な願いは何度も役所に届けられたみたいだ。だけど、子供の数や町の規模などの理由で却下された。どこまでが本当かは、わからない。小学校も中学校も高校も、「こっち」にしかない。それはまだ数年、もしくは数十年と先まで「あっち」の子の運命は決まっているようなものだ。

*

「ゆうちゃん、お友達だよ」

小学校にあがってすぐのことだったと思う。学校から帰ってリビングでテレビを見ていた私は、玄関先からおばあちゃんに呼ばれて走っていった。近くに住んでいるおばあちゃんは一人暮らしをしていて、たまに家に遊びに来ていた。優しく、とても、優しく。私はおばあちゃんの灰色の髪の毛がとても好きだった。母も私に続いて、玄関先まで出迎えに行く。おばあちゃん、と、呼びながら。だけど、玄関について私も母も小さく叫んでしまった。おばあちゃんの隣に、見覚えのある「あっち」の子がちょこんと立っていたからだ。母は「お義母さん」と小さくつぶやいた。私は、彼——鹿野くんがいじめられているのを学校で見て知っていた。他の「あっち」の子よりも、彼はその外見から一段とひどくいじめられていたのを知っていた。

「鹿野永樹くんだよ、ゆうちゃんと同い年だっていうもんだから。途中で会ったの」

「お義母さん、その子、あの、その子は、『あっち』の——」

「ゆうちゃんの、友達だろう？」

母はそれで黙った。けれど、私たちの間には拭い去れそうもない気まずさが流れていた。

「琴子（ことこ）さん、悪いけどお風呂を沸かしてくれる？ 永樹くん、ちょっと中で待ってよ
うか。ゆうちゃん、永樹くんと遊んでなさい」

おばあちゃんだけがきばきと部屋に上がり、鹿野くんの手を引いて中に入っていく。母がはじかれたようにしゃがんでしばらくうずくまり、私はおばあちゃんの後ろ姿と母を何度も見比べて、仕方なくおばあちゃんの後についていった。

「僕、知ってるよ」

リビングで向かい合い、麦茶を入れたコップが汗をかいている。おばあちゃんと母は隣の部屋でなにやら話しこんでいた。ときたま、母のヒステリックな声が聞こえる。その内容は、小学生の私でも十分想像にたやすい言い合いだった。「あっち」の子が、しかも外見が人よりも特徴的な「あっち」の子が、ここにいる。家にいる。目の前にいる。どうしていいのかもじもじとしていた私に、彼が一言言った。

「いきもの係で、いつも花壇にお水あげてるでしょう。僕も二組のいきもの係なんだけどね、お水あげたいんだけどね、先生にもお友達にもダメっていわれて、今日も、あげようかとおもったら、そうしたら、六年生の子がね、そうしたらね、」

彼の瞳からぼろぼろ涙が零れ落ちた。色素の薄い瞳は、まるで作り物のように綺麗で透き通っている。池に落とされたのだと、彼はしゃくりあげながら言った。どおりで生臭いわけだ。着ていたTシャツも乾いていたけれど緑なのか茶色なのかよくわからない色に染まっていて、髪の毛もぐったりと額にくっついている。ランドセルも傷だらけで汚かった。うう、と、彼はテーブルに突っ伏した。隣の部屋からおばあちゃんが出てくる。鹿野くんの背中をそっと撫でる。

「お風呂、入んなさい」

彼は頷いて、おばあちゃんの後を着いていった。母も出てきて、赤く晴らした目のまま私を見つめ、何も言わないで抱きしめ、ごめんねとつぶやいた。母は決して急進派なわけではなかったけれど、「あっち」の子を「こっち」につれてきた、まして家にいれて親切にしたなどと、急進派の人たちに知れたら母だけでなくその子である私でさえも何かに巻き込まれるのではないか、と思ったのだろう。決して急進派の多い地区ではなかったけれど、町全体で見れば多数の人が急進派なのだ。

「ありがとうございました」

お風呂を出て、彼はすぐに出て行った。私と年も変わらないのに私よりも丁寧に、玄関でお辞儀をした。母は何も言わず、無言でお辞儀をした。彼の髪の毛はふわふわと風もないのにそよいでいて、少し充血していた瞳は相変わらず澄んでいる。なぜ彼がいじめられなければならないのだろう。初めて浮かんだ、疑問だった。おばあちゃんが彼と一緒に出て行った。

その数日後、私は放課後に係の仕事をしていた。小学校の各学年に花壇があって、そこに水をあげたり、クラスで何かを飼うときは世話をするいきもの係。面倒でやりたがらない子が多かったけれど、私は何かを育てたりするのが好きだったからとても楽しかった。ふと思い出す、鹿野くん。

「遊都ちゃん」

聞いた声に振り向く。陽の光にかがやくふわふわの髪の毛。鹿野くんだった。手にジョウロを持っている。

「今日はね、お水あげられるんだ、つかまる前にきたから」

笑って、彼は言う。口元に小さな赤い痣があった。家にきたときにはなかったから、今日までの数日の間についたのはわかった。

「一緒にあげてもいい？」

「……うん」

小学校の小さな中庭で、並んで水をあげた。自分の家族のことを話したり、得意な教科のことを話したりした。それが、永樹と話したきっかけだ。

永樹は、とても博識で優しく何より強かった。小学校のときも中学校のときも、私の家に来た以来泣き言一つ涙一つこぼさなかった。いつも微笑んで、嫌がらせを受けてもやり返したりすることもなくおだやかだった。もちろん、隠れて会うのがほとんどだったし、学校ではほぼ他人のフリをしていた。彼が他の生徒に囲まれている横を、私は通り過ぎたこともある。ただ、握りこぶしをつくるぐらいしか私にはできなかった。

でも高校生になると他の町や市から来る生徒もいるから、「あっち」と「こっち」のことを知らない子もいる。そういう子たちの流入は、私たちのくだらない因習に大きな影響を及ぼす。小学校や中学校には「あっち」と「こっち」の子しかいなかったのに、遠い場所から来る子もいるのだから当たり前だ。永樹にも、「あっち」でも「こっち」でもない友達がいるようだった。もともと人好きのする性格なのだから当たり前だろう。私も、少しは学校でも永樹と話すようになった。それでもどうしても周りを気にしてしまう。もう性みたいになっていた。でも、中学校の

ようないじめもなくおだやかな日が多い。ただ、気にしない子が多くなるぶん、「急進派」のいやがらせは圧縮されてねちっこさを増す。

*

「おい、遊都」

ざわつく校内で呼ばれ、振り向くと堀越が廊下で突っ立ってこちらを見ていた。嫌な予感がある。茶髪と、両耳にあけたピアス。高い身長。整えられた眉毛。少し鼻が曲がっているけれど、イケメンの部類に入ってるらしい。実際、彼はモテる。明るいし、クラスの中心的存在にもなる。だからって私はかっこいいとは思わない。でも知ってる。理子は堀越のことが好きなこと。堀越の父親はPTAの会長で熱心な「急進派」だってこと。永樹を傷つけているのは、いつも堀越とその取り巻きだっていうこと。そして私と堀越は小学校からの同級生で、家も近くていわゆる幼馴染だ。とはいえ仲が良かったのは私たちが小学生の、それも低学年の頃の話だ。今は全然話したりもしない。たまに堀越が突っかかってくるけれど、いつもほとんど無視している。今日も無視をしようと思って立ち止まった足を動かそうとした。

「話あんだよ」

彼に肩を掴まれてしまった。逃げられない。何、と問いかける声に変にかすれていた。場所を変えようというので、屋上に出た。雨は止んでいたけれど湿度が熱にむさされて不快感が増す。タオルハンカチで顔半分を覆った。フェンス越しに見えるグラウンドの整備をサッカー部がしている。その向こうに水かさを増した川が流れている。遠くに「あっち」が見える。「こっち」と同じように町が広がっているのに、何ら変わりはないのに。私の隣にいる堀越も、私も、理子も、永樹も、何も変わりはないのに。

「お前さ、鹿野とちょこちょこ会ってんだって？」

うんざりする。自然とため息が出た

「……その、何が悪いの」

「別に、悪いわけじゃねえけど、お前ら付き合ってるの？」

「付き合って、ない」

「そうか？ 本当に？ お前さ、小学校んときからなんだかんだってあいつにかまってんじゃん？ 好きなんだろ？」

グラウンドを同じように眺めていた堀越は向きをかえ、私を見つめながらフェンスにもたれた。ぎしり、とフェンスが歪む。目はあわせない。彼の目は獲物を追い詰めている狡猾な狐のようだ。にやにやと笑って、人が困る様や苦しむ様を見て喜んでいるようにしか見えない。小学校の高学年になると、堀越を頂点とした男の子のヒエラルキーが出来上がっていて、彼はいつも玉座の上から、部下を動かして気に食わない男の子や女の子、ときには教師すらも追い詰めて退職に追いやったことだってあったのだ。そんなのがモテるといふのだから、女の子は見る目がない。といつつ、変な緊張が体を動かなくさせる。

「そんなことない」

「あ、そう。じゃ、やっぱ付き合ってるの」

「何言ってるの？ 私もう行くよ。話ってそんだけ？」

きっとにらんだ。堀越が予想外に近くにいて目が泳ぐ。彼はにやりと笑う。

「そんなむきになんなくてもいいじゃん。やましいことあんじゃねえの？ 好きなんだろ？」

「何、もうしつこいよ」

「俺のこと断ったのも、鹿野のこと好きだからか」

彼の口は、いつも通り不適に歪んでいたけれど若干引きつってもいた。私は固まったまま。サッカー一部の掛け声がどんよりとした空に向かっていく。けれど、まるで跳ね返されたように、中空でぐるぐると回って消えていったように聞こえた。堀越はぐいと私の腕を引く。口元からタオルが離れていった。彼の指先は湿っている。

高校に上がる前、堀越に電話で告白された。その頃も、彼は当然のようにヒエラルキーの上に存在していたし、私が彼と付き合うことも、彼の中では想定されていた出来事のように、堀越は私に「付き合っただけ」ではなく「付き合え」と言った。もう永樹のことが好きだった私は丁寧に断ったのだけれど、堀越は学内でまるで私のこと見張っているように見ていることがある。理子もきっと気づいていて、彼女がたまに堀越の名を出すときは人知れず緊張する。

「.....そうだったらどうなの」

堀越の指に力が入った。汗がこめかみを流れた。

「.....お前のじいちゃんさ、『あっち』モンなんだろ？ だから永樹と仲良くしなきゃって思っただろ。偽善者。お前さ、結局『あっち』の人間の仲良くしてるっていう、その気持だけだろ？ それで好きとか笑わせんなよ」

*

夏が近くなっているというのを知るのは空気の湿度と、日暮れが遅くなっているのとあとは、見える星座が違うということ。教えてくれたのは永樹だった。でも、自分で気づいたのは、夏になると星が見難くなるということ。梅雨と夏の湿りで、星は一つも見えない。

「遊都？」

隣に並ぶ、その雰囲気だけで分かる。永樹は私とおなじようにつなぎ橋の欄干にもたれて上を見上げた。曇り空がどこまでも続いていて、星なんか何も見えない。明日は七夕なのに。

「珍しいね、遊都から連絡くれるとは。橋で話したら堀越たちにばれるよ」

「こんな時間に、うろついてる人なんかいないよ」

もうすぐ日付が変わろうとしていた。車は一台も通らない。歩行者もいない。私と永樹だけだった。「あっち」も「こっち」も、灯りは少なく町自体が眠っているように見える。永樹の横顔をちらりと見た。鼻筋の通った顔はカッコいいというよりも、綺麗だ。夜だけど、そのやわらかな髪の毛は艶を失わない。一度、髪を染めてカラーコンタクトをしないのかと尋ねた。他にもたくさん永樹のような外見の人たちはいるけれど、中にはやっぱりそういうことをして隠す人もいた。染めたりカラーコンタクトをいれることで永樹が蔑まれずに済むのならと思ったからだ。でも、彼はただ笑って何も言わなかった。今になっては、染めたりしなくてよかったと思う自分がいる。

何も間違っていないし、隠すことなんか何もないのだ。

「明日、七夕だけこの分じゃ織姫も彦星も会えないね」

「星なんか塵みたいだって言ってたくせに、そんなこというの」

「天の川がそんなに汚ってわかってるなら織姫も彦星も会わないほうがいい。逢瀬にはロマンチックな場所がいい。この橋みたいなの。ああ、でも、ここも汚い川の上だったかあ」

彼がこっちを見てふっと笑った。涙がこぼれた。

「……どうした？」

「……私のおじいちゃん『あっち』の人なんだって」

「誰がそんなこと」

「堀越」

「……本当か」

「わかんない。でも、それだったらおばあちゃんが『あっち』の人に……永樹に優しくったのもわかるし、おじいちゃんのことまったく聞いたことがないし。お父さんもね、おばあちゃんからは離婚したとしか聞いてなかったみたいで」

こんな話を永樹にするべきではないことはわかっていた。永樹のことや、「あっち」の人に対する仕打ちや、そういうものに憤りや疑問を覚えたとしてもやっぱり、私は所詮「こっち」の人間だった。自分に「あっち」の血が流れているかもしれないという、その事実でこんなにも不安になってしまう。しかも確認のしようがなかった。おじいちゃんの行方はわからないし、おばあちゃんは私が中学生の頃になくなった。父と母には直接聞けず、なんとなく聞いただけだ。川の流れる音が、静かに響く。むわりとした湿度が、私たちを包んでいた。

「遊都」

「うん」

「……遊都は向こうの人だよ。だから、別に、俺たちと同じ血がもし流れていてもそれは変わらない」

「永樹」

「遊都は、俺たちみたいに汚れてないよ。だって向こうに住んでる。おばあさんも、お父さんもお母さんも向こうの人だから」

永樹の頬には、まだ治らない痣がある。肘には、中学校のときに堀越たちに突き飛ばされて切ってしまった傷がまだ残っている。脛にもいくつも傷があるのを知っている。傷を手当したこともある。だけど、私は、所詮「こっち」の人間だった。その立場に立たされるかもしれないとき、私は永樹のようにきっと向き合うことができない。決して永樹を見下したりなんかしたことはない。こんなことを言わせたかったわけじゃない。だけど、でも、私は。偽善者。

永樹の目が、何もかもを見透かすような目が、私を見ている。

「私、私は、永樹が好きだよ。汚れてるなんて、思っていない」

「そんな、無理しなくていい。遊都が安心するなら俺は汚れてても別にいい」

「よくない、私そんな風に思ったこと一度も――」

「いって、言ってるだろ。もういいよ、偽善者みたいなこと、いうなよ、遊都からそんなの、

聞きたくなかった！」

声を荒らげた永樹は暫くしてごめん、と小さく呟いた。大丈夫、と、私はもっと小さな声で答える。

なぜ川が流れるのだろう。なぜ橋がかかっているのだろう。織姫と彦星は、一年に一度しか会えないのに、橋なんかかかかっていないのに、強い絆で結ばれている。なのに私たちは、橋でつながる「あっち」と「こっち」の絆は、驚くほど脆くて拙い。

送っていくという申し出を断った。自転車があるから、というと、じゃあ橋を渡りきるまで、と永樹は隣を歩いてくれた。何もしゃべらない。お互いが、お互いの距離をはかりかねていた。自転車にまたがる。振り返った。永樹が小さく手を振っている。振りかえしてから、ペダルを力いっぱいこいだ。本当に偽善者なの？ 私が？ 永樹は本当に汚れてるの？ 「あっち」の人だから？

*

放課後になると雨が降ってきた。しょっぱなから土砂降り、せつかく今日は七夕で、夜は永樹と約束をしたのに、と思った。傘もささないで私は堀越と川原で対峙している。すぐにでも帰りたい。でも、私は、帰れない。なぜ？ なぜだろう。意味はとくにないような気がしてきた。

「昨日のこと訂正して」

「はあ？ お前のじいちゃんが『あっち』のモンだってことを、バラさないでお願いします、だろ？ お前なんだかんだで偽善面しやがって鬱陶しいんだよ」

「あんたどこまでもバカなの？ 私のこと偽善者って言ったことだよ。私、永樹のことが好きで、だから仲良くしたいだけ。あんた、結局永樹のことうらやましいだけでしょ。違うの？」

「お前、いい加減にしろよ」

雲が切れていくのに、雨はやまない。切れ間から差し込む光はまぶしく、草いきれの匂いが鼻を刺激して、川の流れる音がうるさくて、彼が何か光るものを手にしているのに気づかないでいた。

あの日、永樹が初めて私の家に来て泣いたこと。一緒に花壇に水をやったこと。誰にも見つからないように、隣の市の花火大会に行ったこと。つなぎ橋の上で、たまに手をつなぐこと。そういうことを、思い出した。堀越が近づいてくる。殴られる、と思った。彼の手にカッターが握られていた。

*

白い病室の中で、永樹は枕にもたれながら静かに雑誌を読んでいた。個室のため、彼がページをめくる以外は音がしない。頭には包帯がまかれていて、ふわふわだった髪の毛はなく丸坊主になっていた。頬にガーゼが貼ってある。気配に気づいたのか、こちらを見た。

七夕の日、私と堀越が言い合いをしていることを理子から聞いた永樹は、私が堀越に刺される寸前のところで私をかばい、代わりに刺された。堀越は何度も刺したり落ちていた石で頭を殴ったりしていたようで、私はすぐに救急車を呼んだけれど出血がひどく、永樹は集中治療室に運ばれたのだった。雨の中、呆然としていた堀越は警察に連れて行かれた。

集中治療室を出て個室に移ったというのも、理子から聞いた。どこでそういう情報を仕入れてくるのかはわからないけれど、その話を聞いてもお見舞いに行く気にはなれず、いつのまにか夏休みになってしまった。強い陽光は、カーテンをすりぬけながらも白い部屋を明るく照らしている。

「七夕、ごめんね」

永樹の声は柔らかく、鼻の奥がすぐにつんとした。

「ううん」

「土砂降りで、織姫も彦星も会えなかったね」

「ううん」

「でも、会えなかったほうがいいよ。天の川なんか綺麗なところじゃないし」

「ううん」

「遊都、泣かないで。俺たちもあそこで会わなくてよかった。あの川だって、綺麗なところじゃないから」

「ううん」

持っていた花束を落とした。涙が止まらなかった。へたりこんで、わんわん泣いた。病院の床は冷たくて、自分が温度をもった生き物だということを感じさせる。

「遊都、おいで」

よろよろと立ち上がり、永樹のそばに行く。ベッドに座れというので大人しく従った。彼はゆっくりと起き上がり、私の隣に座る。寝ていて、と促そうと思ったが嗚咽のなごりで声が上手くでなかった。点滴の管が揺れている。彼の手が、私の肩を抱いた。温かくて、彼も私と同じ、温度をもった生き物だと、改めて思う。

「ごめん、永樹ごめんね、ごめんね」

「……堀越がね、もうすぐにでも出るみたいだよ」

彼の声は震えていたけれど、手には力がこもる。

「結局、橋を渡っても変わらないんだ。繋がったって、変わらない。どうして川を渡ろうなんて、思ったんだろう。繋げようなんて、思ったんだろう。天の川の対岸を、繋げようなんて思った人なんか、きっと誰もいないのに。それでもうまくやれてるんだよ、織姫と彦星は。もしかしたら、七夕じゃなくてもこっそりあえるのかもしれないし」

永樹の左手が、私の左手をつかんだ。手の甲にも、ガーゼ。

「最初、遊都のじいちゃんが俺たちと同じかもしれないって聞いたとき『ざまあみろ』って思ったよ。偽善者って、思って、でも、やっぱり俺は遊都が、好きだ。遊都の泣く顔なんか見たくないんだ。こんなくだらないことで、縛られる遊都を見たくないんだ。向こうの人だったとしても、遊都が好きだよ。じゃなかったら、俺は嘘でも『汚れてる』なんて認めないし、本当に俺が排除される側であっても、遊都が排除する側に立てるなら俺は、それでいいと本気で思う。なあ、遊都、そうだろ。遊都が偽善で俺を好きになってくれたとしても、俺は、それがたまらなく嬉しいよ」

「……私も永樹が好きだよ。『あっち』の人でも『こっち』の人でも、きっと永樹を好きになってた。永樹だから、好きになってた」

涙が二人の手を濡らした。どちらの涙かはわからなかった。

しばらく二人で泣いていた。まぶしく陽光に照らされる部屋で、二人寄り添って泣いていた。天の川を渡った織姫と彦星も、互いの幸せを願ってこんな風に泣くのだろうか。

「遊都」

病室を出るとき、永樹が私を呼ぶ。

「何？」

「俺、引っ越すことになったんだ。退院したらすぐに、もっともっと向こうに。川なんか、ない場所だよ。川なんかいないから、俺は会いに行く。もう遊都も、向こうの人じゃなくなるから会いに来てくれるか？」

「私も行く。ねえ、私思ったの」

「うん？」

「織姫も、彦星も、結局星なんですよ。そうしたら、きっと、天の川なんか飛び越えて、川の上で会えると思うの。川なんかやっぱり、関係ないんじゃないかな」

「.....どうかな。川の上なんかじゃ遊べないよ。俺はベッドで遊びたいな」

「バカ」

柔らかな午後に、私も永樹もふと微笑みあった。

<了>

銀河の上じゃ遊べない

<http://p.booklog.jp/book/45384>

著者：こんにやく

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mokokiko/profile>

表紙の写真をお借りしました。

境界線シンдрーム：<http://blsyndrome.web.fc2.com/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/45384>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/45384>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.